

英詩訳注(1)

雇い人の死 (ロバート・フロスト)

松 田 誠 思

メアリはテーブルに向かって坐り、ランプの火影を見つめながら
ウォレンの帰りを待っていた。足音が聞こえると、
彼女は爪先立ちに暗くなった通路を駆け抜け、
入口で事の次第を知らせて
彼に注意を促した。「サイラスが戻ってきたのよ。」
彼女は夫をドアの外に押し出し、
後ろ手にそれを閉めて、言った。「やさしくしてやってね。」
彼女はウォレンの腕から市場の買い物を受取って
玄関に置くと、彼を促して
木の階段に並んで坐らせた。

「俺があいつにやさしくしなかったことがあったかい？
でも、もうヤツを戻らせるわけにはいかないんだ」、と彼は言った⁽¹⁾。
「この前の乾草作りの時、そう言っておいたんだよ。
出て行くと言うなら、もうこれでおしまいだ、とな。
あいつに何の取り柄がある？ あの年で、
ろくに仕事もできないあの男を、ほかの誰が面倒みるかい？
どれだけ役に立つか、てんで当てにならん。
一番手がほしい時に、いつも出て行くんだ。

ヤツの料簡は、せめて煙草錢ぐらいの
小金は稼がにゃならん、そうすれば
物乞いもせず、人に恩を着せられずにすむというわけだ。
俺の言い分はこうだ。『よし、そういうことか。払ってはやりたいが、
俺には決まった賃金はとても払えない。』

『よそ様では払って下さるんですが。』『じゃあ、よそ様で頂戴しろ。』
ほんとうにそうなら、よそに行ってヤツの実入りがよくなるのは、
いっこうにかまわん。しかし、いいかね、
ヤツがそういう話を切りだしたら、必ず陰に誰かがいて、
小金でヤツを釣り出そうとしているんだ——
どこでも働き手がほしい乾草作りの時期にはな。
冬になると戻ってきやがる。たまったもんじゃない。』

「シーッ、大きな声を出さないで。聞こえるわ」とメアリは言った。

「聞いてもらいたいよ。いずれ聞いてもらわねばならんことだ。」

「疲れきってるのよ、あの人。ストーヴのそばで眠ってるわ。
ロウさんのところから帰ってみると、ここにいたのよ、
蹲るように納屋の戸にもたれかかって、ぐっすり寝込んでたの。
みじめな様子で、ぞっとしたわ——
何も笑うことないでしょう——あの人だとはとても思えなかった——
戻ってくるとは思ってもいなかったし——すっかり変わり果てていて。
あなた、見ればわかるわ。」

「どこをうろついていたって言うんだ？」

「何も言わないのよ。わたし、家まで引きずってきて、

お茶を出し、煙草を吸わせようとした。
旅の話をさせようとしたのだけれど、
まったくだめなの。こくりこくり居眠りしてるだけで。」

「ヤツは何と言ったんだ？ 何か言ったのか？」

「ほとんど何にも。」

「何か言ったろう、メアリ、正直に言ってくれ、
旦那のために草地に溝を掘りにまいりました、と言ったんだろう。」

「ウォレン！」

「そう言ったろう？ はっきりしてくれ。」

「もちろん言ったわ。あの人が何と言えは気がすむの？
いかになんでも、あの気の毒な年寄りが自尊心を守ろうとして、
精一杯心を砕いているのを、だめだとはおっしゃらないでしょう。
ほんとうに知りたいとおっしゃるなら、言うわ、
あの人、上手の牧草地の草刈りもするつもりだと言ったわ。
言うことが今までとどこか違うでしょう？
ウォレン、あの話しぶりを聞いてほしかったわ、
あの人、何もかもごちゃまぜに話すのよ。
二、三度様子を見直したわ——とても変なものだから——
寝言を言ってるのじゃないかしら、と思って。
あの人、ハロルド・ウィルソンのことをしつこく喋るの——覚えてるでしょ、
四年前の乾草作りの時に雇った男の子。
今は卒業して、母校の先生をしてるらしい。」

サイラスは、あの子をもう一度呼び戻してほしいって言うのよ。
二人が組んで仕事をするんだ、
二人の力でこの農場をちゃんと整備してみせる、って言うの。
そのことと他の事が、話しているうちにこんぐらかってしまうのよ。
ウィルソンという若者は、教育を受けて変なことを口走るけれど、
見所のある男だと言うの。——ほら、あの二人、
七月中ずうっと焼けつく太陽の下でやり合ってたでしょう、
サイライスは荷車の上で乾草の荷造りをし、
ハロルドはそのそばで草を放り上げながら。」

「ああ、俺は気をきかせて、聞こえないように離れた所にいたがな。」

「何とまあ、あの頃のことを悪夢のようにサイラスを悩ませているのよ。
まさか、と思うでしょう。わだかまりが尾を引くことって、あるものねえ！
若い大学生のハロルドの自信が癪にさわったんだわ。
それで何年たっても、探し続けてるの、
あの時使ってやればよかったと思う論法を。
同情するわ。言うべきことを後になって思いつくのが、
どんなにくやしいものか、よくわかる。
あの人、ハロルドと言えばすぐラテン語のことを連想するのね。
ハロルドの言い草をどう思うかってわたしに訊くの、
あの若僧、ラテン語を勉強するのは、ヴァイオリンと同じで
好きだからやるんだと——そんなの屁理屈だ、って言うの！
ハシバミの枝で水の湧く所が探しだせる⁽²⁾といっても、
あの若僧は信用しようとしな——
それこそ学校がろくなことを教えていない証拠だ、って言うの。
もう一度言って聞かせたがってたわ。それよりなにより、
乾草の積荷の作り方をあの若者に教えてやれる機会が、

もう一度あればいいと思っているのよ。」

「たしかに、あれはサイラスの名人芸だ。
フォークですくい上げた草を即座に丸めて、
一つ一つ後で見分けられるように番号札を付ける。
だから積荷を下ろす時は、一つずつ束を見分けて
やすやすと取り出せる。実に見事なものだ。
丸めた束を、大きな鳥の巣のように取り出すんだ。
自分の持ち上げようとする乾草の上に立って、
身体ごとすくい上げるようなヘマは、絶対にやらない。」

「その秘訣をあの子に教えてやれば、
ともかく人のために何か役立つと思ってるのよ。
男の子が本の虫になってるのが、鼻持ちならないんだわ。
かわいそうなサイラス、ほかの人のためにあんなに気をつけて。
振り返って誇りに思えることが何一つなく、
先を見て希望の持てることも何一つなく、
どこまで行ってもものっぺらぼうの一本道。」

月が、空全体を丘の方へ引きずるようにして、
わずかに西空に沈みかけていた。
その光が静かに彼女の膝に降り注いでいた。それに気づくと、
彼女は光に向かってエプロンを広げた。
庭の花壇から軒まで露をおびて張りつめた
朝顔の蔓のあいだに、彼女は手を差し延べ、
あたかもハープの弦のようなその蔓を爪弾き、彼女のそばの
闇の中にいる夫の心に滲み入る音なき旋律を奏でる様子であった⁽³⁾。
「ウォレン」、彼女は言った。「あの人、死ぬために家に帰った^{うち}のよ。」

今度はもう出て行く心配はないわ。」

「家に？」、彼は嘲るように言った。

「そうよ、たしかに家よ。

結局、家という言葉はどうとるかの問題でしょ。

もちろん、あの人、わたしたちには赤の他人だわ。

獲物を追って疲れ果て、森からさまよい出て

わたしたちの所へ来た見知らぬ猟犬と同じよ。」

「家とは、人が帰って行かねばならない時、

人びとが迎え入れてやらねばならない場所だよ。」

「それだけの価値がなくても、

ともかく人が受入れてもらえる場所、と言った方がいいわ⁽⁴⁾。」

ウォレンは身を乗り出し、一、二歩前に出て、

木切れを拾って元の場所にかえると、

それを手で折って、ぽいと捨てた。

「サイラスには、自分の兄弟の所よりも

俺たちの所へ来る権利があると思うのかい？

ここからわずか13マイル歩けば、弟の家に行ける。

サイラスは、今日それぐらいは歩いたはずだ。

なぜそこへ行かないんだ？ 弟は金持ちで、

ひとかどの人物だ——銀行の重役だよ。」

「そんなこと、あの人言ったことがない。」

「でも、わかってるんだ。」

「もちろん、兄弟が助けてやるべきだと思うわ。
必要があれば、そう取り計らうわよ。当然、
その人が受入れてやるべきだし、喜んでそうしてくれるかもしれない——
見かけよりはいい人かもしれないし。
でも、少しはサイラスを憐れんでやって下さいよ。
肉親であるのを誇りに思ったり、
兄弟に何か期待できるものがあれば、
今までずっと黙ってるはずがないでしょう？」

「二人のあいだに、何があるのかな？」

「たしかなのは、
サイラスはああいう人で——わたしたちは平気だけれど——
肉親にとってはがまんできない人間だってことよ。
あの人、そんなに悪いことは何もしたことがない。
自分がどうして人並みの人間でないのか、
わからないのよ。つまらない人間ではあっても、
恥をしのんで兄弟に取り入るようなこと、したくないのね。」

「サイが他人を痛めつけたとは、俺には思えないよ。」

「もちろんよ。でもあの人^{かど}が角のとがった椅子の背に頭をもたせ掛けて、
ぐらぐらさせるのを見ていると、痛ましくて。
ソファに寝かせようとしても、きかないの。
中に入って、どうすればよいか見てきてちょうだい。」

今夜はあそこにベッドを用意しておいたわ。

見たらびっくりするわよ——すっかりやつれ果ててるから。

もう働けなくなったのよ、きっと。」

「そう早まったことは言いたくないが。」

「早まってなんかいないわ。さあ、行って自分の目で見てごらんなさい。

でも、ウォレン、さっきの事情を忘れないでね。

あの人、あなたのために草地に溝を掘りたい、と言ってるのよ。

ちゃんと計画があるんだから、絶対に笑わないでね。

そのことは話さないかもしれないし、話すかも……

わたし、ここに坐って見ているわ、あそこを流れて行く小さな雲が、

月におつかるか、はずれるかを。」

雲は月におつかった。

そして、月と小さな銀色の雲と彼女の三者が、

灰白く光りながら一線に結ばれた。

ウォレンが戻ってきて——彼女には早すぎるように思えた——

彼女のわきにすべり寄り、手をつかんで待った。

「ウォレン?」、彼女は尋ねた。

「死んでいる」、彼の答えはそれだけだった。

(注)

Robert Frostの劇的物語詩 (dramatic narratives) は、叙述の形式から見ておよそ三つに分類できる。

- (1) 一つの場面や情景を客観的語り手が描出し、その劇的効果とか意味が、対話や人物の行動よりも語られる場面や情景そのもののなかにあるもの (“An Old Man’s Winter Night”、“The Most of It” など)。
- (2) 一人の語り手が物語の舞台と展開の中心に位置を占め、自分自身の境遇や生き方、性格像を開陳するもので、いわゆる劇的独白 (“The Pauper Witch of Grafton”、“A Servant to Servants” など)。
- (3) 二人以上の人物が、対話と行動を通じて相互の対立、内的葛藤を提示しつつ、人間認識と相互理解 (あるいはその不可能性) を深めてゆくもので、いわゆる劇詩 (“The Death of the Hired Man”、“Home Burial”、“The Fear” など)。

“The Death of the Hired Man”は、〈作品の形式ではなく叙述内容そのものが劇的であるほど、作品はすぐれたものになる〉というフロストの所信を、最も見事に達成した一例。この詩の劇的性格は、人物の行動よりも対話を通じて示される心的態度の違い、そこから生まれる対立の緊張感、言葉を通じてその対立を乗り越えようとする真摯な努力にある。そして、ある夫婦が一つの共通の問題に直面して、これを〈理性の論理〉と〈心情の論理〉のいずれか一方のみによって解決することの不毛を示し、両者が相補的に用いられる時、はじめて人間認識の深化が可能になることを、両者の対話の劇的緊張によって提示する。

従って、聴き手 (読み手) に求められる第一の課題は、対話の展開のモメントとなっている言葉を的確にとらえることである。この詩においては、‘kind’と‘home’が特に重要で、WarrenとMaryの対話の中で両者の心的態度を浮き彫りにするとともに、Silasの死を契機に新たな意味の奥行きを示す。第二は、詩の冒頭とクライマックスと終結部に配されている語り手の叙述文が、劇的にどのような機能を持っているかに注意することである。つまり、これが物語の舞台設定と人物の置かれている劇的状況の提示であるだけでなく、人物の行動と対話のみによっては確定できない彼らの生のあり方を、より大きなコンテクストの中に位置づけ、照らし出そうとしていることに留意しなければならない。

- 1) Máry sat músing on the lámp-fláme at the táble
Wáiting for Wárren. Whèn she héárd his stép.
She rán on típ-toe dówn the dárkened pássage
To méet him ìn the doórway wìth the néws
And pút him òn his guárd. ‘Sílás is bák.’
She púshed him óutward wìth her thróugh the dóor

And shút it áfter hère. 'Be kínd', she sáid.
She tóok the márket thínghs from Wárren's árms
And sèt them òn the pórch, then dréw him dówn
To sít beside her òn the wóoden stéps.

'When was I ever anything but kind to him?
But I'll not have the fellow back,' he said. (ll. 1-12)

先に指摘したとおり、ここには物語の舞台設定と登場人物の劇的関係の骨格が提示されている。Maryの'Be kind'が、Warrenとの対話のきっかけとなり、やがてSilasをめぐる両者の心的態度の違いを明らかにしてゆくキーワードとなる。冒頭の一行はブランク・ヴァースの定則からすれば破格であるが、むしろそこに重要な意味が隠されている。特に'lamp-flame'が強調されているのは、Maryの見つめる「ランプの火影」のむこうに、あるいはそれと重なり合うようにして、死を前にしたSilasのいのちが燃えているからである。ちなみに作者は、後年あるインタヴューの中でこの一行の韻律にふれ、「たしかにこれはまずい。韻律にはずれている。意図的にやったわけではないがね。五詩脚でなく六詩脚あるね」、と言っている (Reginald L. Cook, *Robert Frost: A Living Voice*. The University of Massachusetts Press, 1974, P.215.)。これはフロスト一流の韜晦趣味から出た諧謔であって、定則に従い六詩脚に分かつと、ほとんど無意味な一行となる。韻律の定則よりも作者の詩的直観が、ごく自然にこのような破格へと導いたと考えられる。五詩脚、一音節あまりとするのが妥当 (上記引用を参照)。

- 2) ギリシア人は、生活上必要な指針はすべて〈占いの杖〉で得たと言われるように、古来世界の多くの地方で、〈占いの杖〉は秘密の発見、宝物の探知に用いられてきた。〈杖〉の素材は所により異なるが、欧米諸国では特にハシバミの枝が珍重された。ここでSilasの言うハシバミの枝による水脈の探知も、このような古来の民衆の経験的知恵にかかわる。地下の水源・水脈は陽電気を帯びており、ハシバミの枝を持つと人は陰電気を帯びるので、水脈に近づくと枝がその方向に惹きつけられる、とされる。(Cf. *Encyclopaedia of Superstitions, Folklores and the Occult Sciences of the World*.)
- 3) Part of a moon was falling down the west,
Dragging the whole sky with it to the hills.
Its light poured softly in her lap. She saw it
And spread her apron to it. She put out her hand
Among the harp-like morning-glory strings,

Taut with the dew from garden bed to eaves,
As if she played unheard some tenderness
That wrought on him beside her in the night. (ll. 103-110)

〈西空に沈みかけた月〉、静かに降り注ぐ〈月〉の光を、エプロンで受けとめようとするMaryのしぐさに、Silasのいのちを抱きとろうとする彼女の慈しみを感ずるのは自然であろう。(冒頭の「ランプの火影」が、ここでは「沈みかけた月」の光として表象される。) また、朝顔の蔓のなかに手を差し延べて、〈やさしさ〉の音なき旋律を奏でるかのような彼女のしぐさは、Silasのいのちを抱きとることによって、彼女自身が一条の光と化し、Warrenの心の闇を照らそうとする〈祈り〉のしぐさに似ている。と同時に、ここに描き出される光景は、人間の地上における営みが、人間を越えるある大きな力に包み込まれていること、それを信じなければ救いのない暗闇の中に埋没しかねないことを暗示している。終結部の次のイメージは、この事実をいっそう明確に打ち出している。

I'll sit and see if that small sailing cloud
Will hit or miss the moon.'

It hit the moon.

Then there were three there, making a dim row,
The moon, the little silver cloud, and she.

Warren returned-too soon, it seemed to her,
Slipped to her side, caught up her hand and waited.

'Warren?' she questioned.

'Dead,' was all he answered. (ll. 160-166)

4) 'Warren,' she said, 'he has come home to die:
You needn't be afraid he'll leave you this time.'

'Home,' he mocked gently.

'Yes, what else but home?

It all depends on what you mean by home.

Of course he's nothing to us, any more
Than was the hound that came a stranger to us
Out of the woods, worn out upon the trail.'

'Home is the place where, when you have to go there,
They have to take you in.'

'I should have called it
Something you somehow haven't to deserve.' (ll. 111-120)

世間的には役立たずのろくでなしと見られているSilasの人間像を、すでにMaryは、この直前の対句風の詩行で簡潔に描き出している。('Poor Silas, so concerned for other folk./ And nothing to look backward to with pride./ And nothing to look forward to with hope./ So now and never any different.'— ll. 99-102)。

ちなみに、ブランク・ヴァースに対句(カプレット)をはさむのは、伝統的な強調法の一つで、ここでもその効果が意図されている。無惨な風態と異様な言動から、Silasが死に場所を求めて舞い戻ったことを直知しているMaryは、一人の人間のかげがえのないいのちの重みと、死という厳粛な事実に向きあって、これを受けとめるにたる心のやさしさと勁さをもって、Warrenの立場を相対化する。'home'の定義をめぐる両者の心的態度のくいちがいは、〈父性の理性的論理〉と〈母性の心情的論理〉の対立と言えよう。あるいは、人間関係を権利と義務からとらえ、事の当否、正不正を裁く立場と、事の善悪、正邪を問う理性的判断を越えたところで働く〈慈しみ〉とかく許し)の立場の相補的關係と見なすこともできる。

Silas がついに一度も舞台に現われず、見えざる所で死ぬという設定は注意すべきもう一つの点である。彼の沈黙と、不透明であるがゆえにいっそう重い存在感が、劇的効果の最も重要な源であることは、改めて説くまでもあるまい。Silasの見えざる死は、〈死〉がわれわれ一人ひとりのいのちの奥に隠された謎であり、この謎を鋭敏に感ずる意識を目ざめさせようとするところに、〈作者の声〉を聞きとることができる。

(テキスト)

Robert Frost: Poetry and Prose. Ed. E. C. Lathem and L. Thompson (New York: Holt Rinehart and Winston, 1972)